

合理的選択とは何か？ 人はどこまで合理的か？

▶▶▶ 一橋大学経済学研究科 准教授 竹内 幹

■合理的経済人という批判

経済学が想定する人間像は、利己的に計算高くふるまう“合理的経済人”であるといわれる。そして、そうした個人々が経済主体として利己的にふるまっただとしても、「見えざる手」によって経済全体の調和が達成される——これは経済学の中心命題の一つだ。

ただ、現実の人間はそこまで合理的には行動しないし、利己的な人間を前提とする経済学は冷たい学問だといった批判をこれまで何度も見聞きしてきた。あたらずといえども遠からず。ここでは、その合理的経済人のなす合理的選択についてもう一度考え直してみたい。

■「合理的」の意味するところ

われわれは何かを理解したいときに、納得のいく説明や理論を求める。その説明が正しいかどうかは別として、納得がいけば知的好奇心は満たされる。例えば、日食のような天体現象も「神のなせるわざ」として納得がいくなれば、それを一つの理論として受け入れたということだ。こうした理論になまっていることを広い意味で合理的という。

経済学で合理的選択とは一貫性ある選択のことを意味する。何をもち一貫性というかは後述するが、重要なのは、**第三者にも納得のいく理屈としての客観的な一貫性**を念頭におくことだ。

誰かの主観的な判断を他人が直接観察することはできない。したがって、人の判断を上述した意味で「理解」することは難しいし、理解できたつもりでも、それは観察者自身の推測の域を出ない。

ただし、その主観的な判断でなされた選択や行動は客観的に観察可能だ。経済学は、客観的に観察できる行動（判断の結果）だけにストイックに着目して理論を組み立てる。誰の目にも見える行動だけをもとに、その行動の背景にある主観を間

接的に推定する手法をとっている。

したがって、経済学が分析対象にしたのは——正確に言えば、分析対象にできるのが、一貫性をもった行動なのである。**一貫性ある行動を対象にするからこそ、理論を組み立てることができ、人の主観的判断について論ずることができる。**逆に、一貫性のない行動が出てきてしまえば、お手上げとなる。

一貫性を定義する一つのやり方は、誰かの選択や行動を、金銭換算して吟味することだ。例えば、ある商品のことを好きか嫌いかといったきわめて主観的な判断基準も、本当に好きならば高い値段でも購入するはずだし、高い値段だと購入しないのであれば、そこまで好きではないのだろうという客観的な評価におきかえることができる。もちろん、お金の重みは資産や所得に応じて人によって異なるなどの不備には十分留意する必要があるが、主観的な評価を可能な限り客観化する試みは社会科学のなかではとくに意義深いだろう。

ここまで合理性の背景を解説したのは、なんでもかんでもお金に換算するのが「合理的」なのだとする誤解を避けるためである。**主観的判断の客観化の一つの方法として貨幣という指標**を使っているにすぎない。

また、合理的選択の理論化は、**人々は合理的であると都合よく解釈して理論を組み立てているのではない**。ましてや、人々の選択が合理的でなくてはならないと要求しているわけでもない。合理的選択に焦点をさぼることによって、かりに行動に一貫性があるとすれば、その一貫性にもとづくことで、次になされる選択がどのようなものかを体系的に予測できるのだ。

■合理的意思決定

主観的な価値判断にもとづいてなされた多様な

選択も、金銭換算することによって、比較衡量がある程度可能になる。例えば、ある目的地まで行くために、一番近い地下鉄の駅まで歩いて行きそこから地下鉄に乗るのではなく、1500円を払ってタクシーに乗ったとしよう。この選択の合理性を考えてみたい。なぜタクシーに乗るのかといえば、急いでいる、道順がわからない、疲れているなど、さまざまな理由が考えられる。そうした事情をすべて考慮にいれたうえで、1500円の出費が割に合うかどうかを判断している。

ここでは、簡略化のために、急いでいるという事情はないものとして、表1のような比較ができると考えたい。地下鉄の場合、金銭的費用は200円ですむが、駅まで歩いて行き地下にもぐるのは、とくに夏場であれば階段ののぼりおりなどで体力を消耗するだろう。タクシーに乗れば、1500円かかるが、20分も早く着くことができるし、楽である。

時間20分間と体力1を温存させることの主観的価値を直接におしはかることは不可能だ。だが、タクシーに乗ったという客観的に観察可能な行動からは、時間20分間と体力1を温存させるために、1300円を追加的に支払ったことがわかる。それが意味するのは、次の不等式だ：

時間20分と体力1を温存する価値 > 1300円

経済学ではこのように、金銭を媒体として、人の行動を合理的に説明しようとすることが多い。

■合理的な意思決定はすべてを明示的に考える

合理的選択の特徴は、以下の3ステップを踏むことだ。

- (1) どのような選択肢があるのか具体的に考え、
- (2) 種々の費用と便益とを表1のようにリストアップしたうえで、
- (3) 選択肢の優劣や適不適を考え、選択する。

これが狭義の合理性である。選択をするときに「なんとなく」ですませずに、理由づけを可能な限り客観化して明確にするのが合理的選択といえる。

日常的な選択についても、上記の3ステップを幅広く考えてみることは合理的意思決定の練習に

表1 合理的選択の考え方のイメージ

コスト	地下鉄	タクシー	差
お金	200円	1500円	-1300円
時間の経過	30分	10分	20分
体力の消耗	1	0	1
遅刻の可能性	問題なし	問題なし	なし

時間20分間と体力1を温存させるか、1300円を残すかをはかりにける。タクシーに乗る選択は、前者に1300円以上の価値を見いだしたことを示唆する。

ただし、1500円でタクシーに乗ることが「合理的」かどうかは、判断できないことに注意されたい。この表だけでは一貫性の検査ができないからだ。

なるはずだ。まず選択肢についても、初めからタクシーか地下鉄かだけを考えてはいけない。歩く、走る、自転車を借りる、相乗りする、目的地に行くのをやめる、と幅広く選択肢を想定する。とはいうものの、走るのは想定外な気がするかもしれない。しかし、ある行動を初めから「ありえない」と決めつけるのは合理的ではない。直感的に「ありえない」と感じていても、なぜそれが「ありえない」のかを、ステップ2と3の段階で明示的に考えることがきわめて重要なのだ。こうした理由づけが普段からできていれば、想定外の事態や新しい社会現象に直面したときに、感情や世論の「空気」に流されることなく、理性的な判断がしやすいからだ。

次に、費用と便益を可能な限り列挙する。表1ではお金、時間、体力、遅刻の可能性だけを考えたが、ほかにも健康を要素として考えてもよい。タクシーに乗り慣れてしまうと、お金がかかるだけでなく、歩くという健康維持に重要な習慣も失ってしまうかもしれない。タクシーに乗ることで得られる短期的な体力の温存よりも、長期的な健康の維持のほうが重要となることもある。それぞれの選択肢にどのようなメリット・デメリットがあるかを考えつくすのも重要である。

このように直感的に明らかであっても、何事もしっかりと客観的にとらえるのが、合理的な意思決定の特徴である。

■ 合理性vs直感

ただ、勘違いしてはいけない点がある。まず、合理的意思決定は、必ずしも直感を否定していないことだ。合理的な説明は、時として、直感的に受け入れられてきた伝統に疑問をさしはさみ異議を唱えているかのように思われもするが、その伝統的価値を客観的に説明できれば、伝統を守る目的をより明確にできる。

次に、ある選択を客観的に説明できたとしても、その選択が「正しい」ことを意味するわけではないことに注意したい。例えば、ある犯罪の背景を客観的に説明することは、その原因究明と今後の対策のために意味があっても、その行為を正当化はしない。

三つ目は、客観的に説明ができたとしても、それは広義の合理的選択を意味しないことである。冒頭に述べたように一貫性がなければ、客観的な説明があったとしてもそれはその場限りのものにすぎず、理論とはならないからだ。

■ 再び、一貫性

表1の例に戻り、合理的選択の定義を完成させよう。タクシーに乗るという行為は、要するに、時間と体力を金で買っているといえる。体力はわきにおいておき、時間20分を1300円で買ったと考えよう。あなたが「高い」「もったいない」と感じて、この人がタクシーに乗ったことが非合理的だとは言いきれない。なぜならば、一貫性が保たれてさえいれば、この人が時間20分のために最低1300円は支払うという行動原理に従っている合理的な人だといえるからだ。ただし、別のシーンで、あと1300円出せば体力も温存できて30分短縮できることがあって、そのときには1300円出さなかったことがあれば、次のように：

時間30分と体力1を温存する価値 < 1300円となり、先ほどの不等式と矛盾し、一貫性を失う。こうなったときにはじめて、タクシーに乗った選択は合理的でない（整合的に説明しがたい）と結論する。何か別の行動原理で動いていると推察され、それをつきとめる必要が出てくる。

■ 直感的な選択

ところが、人生は選択の連続であり、そのつど、合理的意思決定をするひまなどない。**直感的な判断は、時間節約という点ですぐれている。**だが、目の錯覚と同じように、直感的な判断が「正しくない」結論を導いてしまうこともある。**近年では、「行動経済学」という心理学との融合分野で、直感が正しくない判断を下す事例が研究されている。**

「モンティ・ホール問題」として知られる簡単なゲームでも、数学者を含む多くの人が正しくない選択をしてしまう。ゲームは次のように進む。三つの箱のうちどれか一つに景品がはいついて、あなたは一つだけ箱をあけることができる。まず、あなたがあけたいと思う箱の一つを選ぶ。その箱をあける前に主催者が、別の箱をあけて「ちなみにこっちはハズレでした」という。主催者は、「残り二つのうちどちらかがあたりですが、あなたは最初に選んだその箱Xをやっぱりあけますか？それとも気にかけて、あけていないもう一つの箱Yをあけることにしますか？」と聞く。正しい選択は箱Yだ。初心貫徹で箱Xをあける場合のあたる確率は3分の1だが、気にかえる人は確率3分の2で景品をゲットする。にもかかわらず、実際に、箱Yにかえる人はあまりいない。

「サンクコストの呪縛」も日常的に起きる正しくない執着だ。サンクコストとは、これまでに投入して回収不可能なコストのこと。選択というのは、これから起きる結果を左右するので、つねに現在と将来を基準に考えるべきだ。ところが、投資資金やそれまでに費やした時間や努力が多いと、プロジェクト（ビジネスでも恋愛でも）の成功が見込めなくなっても、なかなかやめられない。「ここまでやったのだから」という錯覚にとらわれて、損切りできない状態に陥る。合理的に考えれば、現プロジェクトはあきらめ、労力をむだに費やすのをやめ、その労力を新規プロジェクトにあてるほうがよい。だが、人はそうした合理的な判断ができず、感情的に直感的に動くこともある。頭ではわかっているのに、直感が錯覚を起こすことにも十分に留意する必要がある。

合理的選択とは何か？ 人はどこまで合理的か？ 練習問題



- Q1** あなたが日常的に行っている二者択一の選択を考えてみて、表1のように、それぞれの費用便益を列挙したうえで、自分の実際の選択を客観的に説明してみてください。例えば、1週間先の試験のために3時間勉強するかどうか、部活を続けるか引退するかなどを考えてみます。あなた自身の選択についてどのような説明が可能ですか。
- Q2** 「混雑する電車で、妊婦や子ども連れ、つえをついた人が立っていたら、必ず私は、その人たちにすぐに席を譲っています。これは道徳的にも正しいことだと思いますが、合理的とはいえないのでしょうか」と聞かれたら、あなたはどのように答えますか。
- Q3** 教室の全員が参加する、次のような「数当てゲーム」をしてみましょう。各自、0～100の整数のなかから、数一つを選びメモ用紙に書きます。教室の全員がメモ用紙を提出したあとで、みんなが選んだ数の平均値を計算します。さらに、その平均値を0.7倍します。その数（平均値×0.7）をアタリ番号とします。アタリ番号に一番近い数をメモ用紙に書いていた人が勝者です。
- (A)あなたはこのゲームに勝ちたいとき、どんな数を選びますか。
- (B)全員が計算高く合理的に判断しているとみなし、このゲームの結果を合理的に予想することができます。それはどのような予想結果となるのでしょうか。
- (C)あなたの選んだ数と上のBの予想結果とが違っていたら、なぜ違うのでしょうか。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 練習問題 解説 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

Q1 普段の行為を合理的意思決定のわく組みであらためてとらえなおすことがねらいである。普段のなにげない選択も、試験前に勉強しないのが正しいかどうかは別として、実はそれなりに合理的である。自由意志でなした選択は、それが合理的かどうかを問わず、その責任を本人が負う限り尊重される。

Q2 四つの論点がある。**狭義の利己的合理性**：利己的な観点からは説明がつかないように思えるが、実は「人助けが気持ちいい」という利己的合理性で説明も可能である。**狭義の社会的合理性**：元気な人が席を譲れば、社会全体で幸福度の総和のようなものが増加すると考えれば社会的観点から合理的である。**道徳という直感的判断**：こうした合理的意思決定をいちいち計算しなくても正しい選択を導くことが多いのは道徳規範の利点である。**広義の合理性**：「必ず」譲るといっているのであれば、首尾一貫した行動原理であり、これこそ「合理的選択」である。

Q3 このゲームに勝つためには、他の参加者よりも小さな数を選ぶ必要がある。例えば、0～100の間の数字をランダムに選んだときの平均50を出発点に熟慮すると、選ぶべき数は50→35→24→…と0.7倍ずつ小さくなる。筆者がこれまでに実施した15回分のデータ総計では、平均25.67、アタリ番号17.97である（参加者延べ1695人）。

合理的推論の一つとして、「全員がゼロを書く」ことが予想される。誰もが他の参加者に負けまいと推論を重ねれば、皆がだんだん小さい数を選ぶざるをえず、ゼロという結論を得るまでその推論は進む。ただし、この推論は全員が計算高い合理的経済人の場合にのみ妥当し、本当にゼロを選んでも実際のゲームには勝てない。

とはいえ、ゼロ以外の数を選択することが合理的でないともいえない。データをみると、50の0.7倍の35を選ぶ人数が突出しているし、それを見込んで35の0.7倍の24を選ぶ人も多い。このようにある程度理屈が通れば、それを合理的とよぶこともできよう。